

ダンガンロンパ～
Excute～ 希望と絶望
のラビリンス

MOGIびー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

絶望が笑うか、希望が笑うか――。

入学した者は、未来を約束される…。

「超高校級の一般人」両角徹は夢であった『私立希望ヶ峰学園』の姉妹校である『私立未来ヶ丘学園』の入学を果たす。自分の輝く未来は約束された。そう思っていた。しかし、希望なんてどこにもありはしなかった。集められた16名の超高校級の高校生の目の前に突如現れた謎のぬいぐるみ「モノクマ」。そのモノクマから告げられたのは「コロシアイ学園生活」開幕宣言だった…。新舞台『私立未来ヶ丘学園』で新たなコロシアイが幕を開ける…！

この作品は「ダンガンロンパ」「スーパーダンガンロンパ2」「ニューダンガンロンパV3」「ダンガンロンパ3」の二次創作です。また、作者は語彙力皆無でゲーム未プレイです(何で書いたんだろう)。そして、登場するトリックや会話などが変な個所もあるかもしれません。

また、残酷な描写が多数存在します。

そしてトリックや動機、証拠などがガバってます。

それでも大丈夫な方はどうぞ。

(略称) ダンE

目次

Prologue 『16人』

Prologue 異様な入学式 1

Prologue 異様な入学式 5

Prologue 異様な入学式 17

私立未来ヶ丘学園 生徒名簿 21

CHAPTER 1 『ラブ・エフェムラル』 30

(非) 日常編 I 35

(非) 日常編 II 30

(非) 日常編 III 40

(非) 日常編 IV 45

(非) 日常編 V 51

非日常編 捜査 I 62

非日常編 捜査 II 69

Prologue 『16人』

Prologue 異様な入学式 I

『私立未来ヶ丘学園』。

ここに入学した者は、素晴らしい未来が約束される。

そして、俺も今、その未来を約束された。自分の未来を。

俺の名前は、両角徹（もろずみとおる）。ごく普通の高校生だ。

未来ヶ丘学園にスカウトされたのは、「超高校級の一般人」としてだった。たしかに、俺には得意なことも苦手なことも無い。普通に生きている。どうやらその部分が学園側を買われたようだ。まあ、買われたところで嬉しくは無いが、あの未来ヶ丘学園に入学できることに関しては喜びを隠せなかった。

どうやら、『私立希望ヶ峰学園』っていう学園があるらしく、その姉妹校がこの未来ヶ丘学園だという。

学園側がスカウトした人間だけがこの学園に入学することができ、俺は「超高校級の一般人」としてスカウトされたのだ。

俺は未来ヶ丘学園の正門に立って、学園を眺めていた。

なんともすがすがしい気分だ。

俺は一步を踏みだした。

明るい未来が約束されるんだ……！

突然、視界が傾いた。

え……何だこれ……。

そして視界は真つ暗な闇に覆われ――。

「おい、大丈夫か〜」

……誰かの声がある。

俺の目は徐々に開かれていった。

眩しい……。光が視界を包み込む。やがてその光は鮮明な風景へと変わっていった。

白い光が少しずつ、丸いものへと変形していく。

人の顔だ。

「やっつと、目を覚ましたね」

その顔は言った。

俺はゆっくりと体を起こした。

俺の真横にある顔、その奥にはまだ複数の顔が見える。

「おーい、見えてる?」

真横の顔が話しかけてくる。

俺はこの状況がよくわからなかった。

「え、ここは…?」

「どうやら未来ヶ丘学園の体育館らしいな」

たしかに見渡してみればそうである。

『おやおや、みーんなお目覚めかーい?』

ぎよつとした。とても明るい声、能天気という言葉が似合う声だ。しかし、その能天気さに何か底知れぬ悪意を感じ取った。

すると、突然ステージの演台から何かが飛び出した。

それは白と黒の何かだった。ぱ、パンダ……?」

「わあ、パンダだ!」

と、この「パンダらしきもの」に負けなくらい能気な声で女子が言った。

「パンダじゃないよ、モノクマだよ」

不気味だった。それはどこからどう見ても、ぬいぐるみだった。しかし、口が動いている。

「ぬ、ぬいぐるみがしゃべるとは…、どうということだああああああ」

身長の大きい男子が声を響かせる。

「ぬいぐるみじゃないよ、モノクマだよ、この未来ヶ丘学園の学園長のモノクマだよ。全く、出会った瞬間からコレだよ」

場は騒然としていた。

モノクマと名乗る謎のぬいぐるみ…。

一体、何が起きているんだ…。

「でことで、今から入学式を始めます。オマエラ、姿勢を正して！」

何なんだこれ…。

頭の中の整理が追い付いていない。

「ちよつと、いきなり入学式ってどういうこと!?!」

「ほかの生徒はどこにいるのでしょう…私たちがしかないようですが」

「うぷぷぷぷ、他人の心配より自分たちの心配をするべきクマよ、てことでえ」

「オマエラには」

「コロシアイをしてもらいマース」

Prologue 異様な入学式 II

モノクマとやらが発した言葉に、愕然とした。

「ちよつと、どういう意味よ」

外国人らしき女子が、ぬいぐるみを睨みつける。

モノクマは動揺することなく、

「どういう意味って……コロシアイはコロシアイだよお、コ・ロ・シ・ア・イ」

「オラにもちやんと分かるように説明してほしいねえ」

水晶玉を持った男子が困った表情をする。

コロシアイってどういうことなんだろう。

「オマエラの理解能力はミジンコ、いや、ボルボックス以下だね。その名の通り、オマエラに殺しあつてもらうんだよ」

モノクマは演台の上でぐるぐる回りながら言った。

「んー、このぬいぐるみさん、頭がお花畑なのかなーっ?」

着物をまとった女子が、きよとんとした顔でモノクマを見つめる。

「ぬいぐるみでもないし、お花畑でもない!」

「殺し合うって、文字通り人を殺すってことなのか？」

メガネの男子が強い口調で問う。

「もちろんだよ」

相変わらずの能天気ボイス。俺はあまり好きではない。

「こ、殺すなんてことあるわけないじゃん」

チャイナ服の女子がモノクマを指さす。

「あははははは、そうなればみんなここで一生暮らすことになっちゃうよ……？」

「ど、どういうこと……？」

俺の口が久しぶりに動いた。

「オマエラはこの学園で一生過ごすってことだよ」

この場の空気が凍りついた。

衝撃のあまり、体が固まってしまっていた。

自分の意識に反して、体が思うように動いてくれない。

「それでね、人を殺したらなんとこの学園から卒業できちゃうのです！」

「ごちゃごちゃ抜かしおって！覚悟しろ!!」

体の大きい男子がステージ上を駆け上がって、モノクマに掴みかかろうとした。

モノクマは華麗にジャンプし、回避した。

「ああ、この僕学園長ことモノクマにもし逆らうようなことをしたら、きつついきつついお仕置きが待ってるからねえ???」

「ぐぬぬぬ」

何かなんだか…。未だに状況が把握できていない。

「ことで、その他の詳しい校則はそれぞれに配つてある電子生徒手帳で確認してね、てことで、楽しみにしてるよ!」

そう言つて、モノクマは演台から姿を消した。

「な、なんなんだこれは…」

「一体どうしてこんなことに…」

ここににいる全員が動揺していた。

ここで一生活していかないといけない。ここから出る方法は一つ。

誰かを殺すこと。

突然、学園での生活を強いられ、かなり戸惑っている。

「みんな、落ち着こう。これは学園側が仕込んだ試験か何かだろう」

メガネの男子は全員に言い聞かせる。

「とりあえず、自己紹介でもしておこうじゃないか? 互いの素性を知ることが大切だと思うが」

「うん、賛成だね」

「我輩の中の魂も、共感している」

そしてメガネの男子は、一つ、咳をして口を動かし始めた。

「俺は入江鋼太郎。超高校級の生徒会長として学園からスカウトをいただいた」

【超高校級の生徒会長】 入江鋼太郎。

たしか、学園掲示板にはこう書かれていた。

「彼の在学していた学校は、彼のおかげで超エリート校合格率80%にアップした」

彼の行動や取り組みによって、その学校は優等生の集うエリート校となり、そこから超エリート校に合格する者が大幅に増えたという。

「まあ、普通に入江って呼んでくれや。相談があつたら、俺が乗ってやるよ」

頼りになりそうだ。かなりのポジティブ思考なのではないか。

「てことで、次どうぞ」

「じゃあ私が。えーっと、桜谷小麦と言います。まあパティシエしてます」

【超高校級のパティシエ】 桜谷小麦。

たしか、学園掲示板にはこう書かれていた。

「パティシエ界の魔女と称され、彼女の作るケーキは魔法のように甘いという」

そのケーキを、政府も大絶賛したらしい。それから彼女の作るケーキは注文が殺到し

たそうだ。

「よろしくね〜」

魔女という呼称とは違って、かなり高い声で、優しい口調である。しかし、一つ一つの言動にかすかな自信というものを感じる。

「じゃあ、私も早めに自己紹介しておくわ」

前に一歩踏み出る。

「私の名前は天宿歌子。みんなからは超高校級の歌手って呼ばれてるわ」

【超高校級の歌手】 天宿歌子。

たしか、学園掲示板にはこう書かれていた。

「ライブツアーで日本中を駆け回っていて、ファンの数は計り知れない」

今流行っている、超人氣歌手なのである。とても透き通った歌声で、胸の中にまで染み渡るような声だという。

「表ではあんなで裏ではこんな感じだけど、よろしく」

かなり裏表の激しい人のようだ。一言一言に強気な感じが感じ取れる。

「順番的に僕かな？」

俺が目を覚ました時、そばにいた男子だ。

「時幽一つて言うんだ。超高校級のハッカーとは僕のことだよ」

【超高校級のハッカー】 時幽一。

たしか、学園掲示板にはこう書かれていた。

「いろいろなハッカーに対し、自身が独学で身につけた高度なテクニックで、対抗し撃退する」

彼はそのハッキング能力で、いろんなハッカーから情報やプログラムなどを守ってきたという。日本ハッカー界からも一目置かれるほど。ただ、セキュリティソフトが嫌いなんだとか…。

「ハッキングしてほしいものがあつたら、俺に任せろ？」

穏やかな口調で、その口調には何かゆとりがある。

「おう、俺か。俺は超高校級の養蜂家の、二階堂響八だ」

【超高校級の養蜂家】 二階堂響八。

たしか、学園掲示板にはこう書かれていた。

「彼の育てた蜂は人を襲わない。そして、そこで採れるはちみつはまさに絶品である」
蜂が人を襲わないというのはすごいことだ。本人は蜂に刺されたことが一度もないという。

「今日もこのかばんの中に俺の蜂ちゃんを連れてきてるぜ」

「蜂い!？」

桜谷さんが上ずった声を発する。

「ふむ、我輩の封印を解く時が来たようだな。我輩の名は、闇野木炎呪。うつ、左手が疼いてやがるぜ」

【超高校級の中二病】 闇野木炎呪。

たしか、学園掲示板にはこう書かれていた。

「地球に結界を張って、宇宙人の攻撃を阻止した」

異様に嘘くさいが、まあ中二病だからな。そういう呪術の力があるらしい。ないだらうけど。

「我輩の力こそがこの地球を完成させているといっても過言ではない」

過言だな。そう思った俺は正常なはずだ。

「よくわからないけど、たぶんわたくしよね……？」

目をつむっている女子が口を開く。

「福巡円、超高校級の盲目と呼ばれていますの」

【超高校級の盲目】 福巡円。

たしか、学園掲示板にはこう書かれていた。

「生まれつき盲目でありながら、他人の補助なしで行動できる。また嗅覚と聴覚に優れている」

障害を持つ人は何かに長けているということはよくあることだと俺は思うが、彼女は犬には劣るがかなりの嗅覚と聴覚を持っているらしい。

「…今誰かいびきかいてましたよね」

「あ、バレた？」

二階堂君が「あはは」と高らかに笑う。

「うちもうちも。うちは琴津植華だよ、華道部なんだよ」

【超高校級の華道部】 琴津植華。

たしか、学園掲示板にはこう書かれていた。

「日本華道コンテストで100回以上の優勝経験がある」

つまり、華道のプロということだ。部じゃなくて家でもいいのではないかと俺は思うけど。

「えへへー、私のことはあ、うえかちやんつて呼んでねっ」

能天気で行動がおどおどしているように見える。

「次はアタシね、超高校級のゴルフ選手、オリヴィア・バーンスタインでーす」

【超高校級のゴルフ選手】 オリヴィア・バーンスタイン

たしか、学園掲示板にはこう書かれていた。

「世界中のゴルフ大会で優勝経験あり。男性から絶大な人気を誇る」

たしかに、格好がそうだった。あまり詳しく言わないが。とにかく、彼女はゴルフが上手いってことである。

「アタシをずっと見てたらダメよ？」

魅惑的な一言である。

「ああ…私ね…。開木瞳美って言うわ。解剖医つてのをやらせてもらってるけど」

【超高校級の解剖医】 開木瞳美

たしか、学園掲示板にはこう書かれていた。

「学生でありながら、驚異の技術を持ち、正確な解剖結果を導き出し、真相の解明に貢献した」

死体慣れしているのである…。背筋が凍った。

「あ、気にくわないことしたら、この注射器で刺しますからね」

発言にいちいち恐怖を植え付ける。表情の変化がほぼ無いのも不気味だ。

「おおし、オラは超高校級の占星術師の、巫天文だ。占い師とは違うからね！」

【超高校級の占星術師】 巫天文。

たしか、学園掲示板にはこう書かれていた。

「人間や社会について占う能力は、他とは比べ物にならない」

占うということ自体、俺にはよくわからないが、才能はあるらしい。

「でことで、誰か占ってほしい奴、いるか？」

この状況で挙手する人がもちろんいるはずもなく、

「じゃあ次は自分だな」

と、巫君の隣の男子が言った。

「超高校級の金運……だっけな、光金リヨーマだ」

【超高校級の金運】 光金リヨーマ

たしか、学園掲示板にはこう書かれていた。

「道を歩けば、紙幣が落ちている。宝くじを買えば必ず当たる」

まさに金運の持ち主だ。その運を俺にも分けてほしいものだ。

「まあ金運しか無いから、よろしく」

どうやら金運以外は無いらしい。それにしても、抑揚の無い声だ。

「じゃあ次はあたね。あたいは石麗宝、超高校級のラーメン職人だ」

【超高校級のラーメン職人】 石麗宝。

たしか、学園掲示板にはこう書かれていた。

「日本ラーメン協会の副会長を務める」

ラーメンの腕前はたしかということか。日本生まれ日本育ちなので、中国語は全くわ

からないという。

「ラーメンのことならあたいに訊いてくれよ」

そんな場面が果たしてやってくるだろうか。

「ははは、やっと俺の番かい。百鬼勇夜、百に鬼って書いてなぎりって読むんだ。重量挙げが得意だ」

【超高校級の重量挙げ】 百鬼勇夜。

たしか、学園掲示板にはこう書かれていた。

「重量挙げ大会は数えきれないほどの数優勝、車の下敷きになった人の救助活動もした」
力自慢だ。ネズミとハムスターが苦手というのは、実に面白い。

「…言うことねえから次行つてどうぞ」

声は完璧におじさんである。言わないけどね。

「余は東雲聖里、みなは余を超高校級の聖職者と呼ぶ」

【超高校級の聖職者】 東雲聖里。

たしか、学園掲示板にはこう書かれていた。

「東の雲という宗教の創始者」

教祖みたいな類なのか…？

「余を崇めれば、必ずや、新しい道は切り開かれるはずだ…」
ちなみに、彼女にはキレやすい人格がある。

「最後は君だよ」

入江君に指さされた俺は、口を開いた。

「俺は両角徹、まあ超高校級の一般人としてスカウトされた感じかな」

「い、一般人としてか…?」

光金君が目を丸くする。

「今年のスカウトに、くじで一人決める制度は無かったようだな」

時君がマフラーを首に巻き直す。

「とりあえず、さっきモノクマが言ってた、電子生徒手帳つてのを確認しない?」

桜谷さんがみんなに言う。

俺はポケットを探った。ん、かたいもの…?

取り出してみると、何やら薄い端末だった。

これが…電子生徒手帳…。

Prologue 異様な入学式 III

俺は電子生徒手帳の真つ黒なディスプレイを、何を思うでもなくタッチした。すると、ディスプレイが光を放った。

そして、そこに自分の名前などのプロフィールが表示された。

「うおー、よくできてんな」

巫君は感心している様子。

ディスプレイを横にスライドすると、校則が表示される。

- 〔1. オマエラは一生ここで共同生活を送ること〕
 - 〔2. 元から鍵が閉まっている部屋には、絶対に侵入しないこと〕
 - 〔3. 誰かを殺した人物は、他の誰かにバレなかった場合『卒業』ができる〕
 - 〔4. 学園長のモノクマへの暴力は禁止。違反した場合、オシオキがある〕
 - 〔5. 死体が発見された場合、各自の電子生徒手帳に『モノクマファイル』が追加される〕
 - 〔6. 死体が発見された一定時間後に、『学級裁判』を開く〕
 - 〔7. 午後10時〜午前7時を夜時間とし、個室以外での就寝を禁止する〕
- なんだかよくわからないがこの校則、まるで殺人が起きるのが前提かのように説明さ

れている。まあ、殺人なんて起きるはずが無いだろう。殺人を犯してでも、ここから出たいという者はいないだろう。

「どうせドツキリかなんかじゃないの?」

石さんも殺人が起ころとは思っていないようだ。そもそも、これが式典か何かだと思っているようだ。

「学級裁判……?なんか、やばそうだね」

光金君はその整った顔に微笑を浮かべた。

「仮にそういう行事じゃなく、ガチなほうだったとしても、人を殺すなんてことをする人間なんていないはずよね」

と天宿さんが語尾を強める。

「天宿様はそう思われてるのね」

東雲さんが小さい声で言う。

「さ、様……?」

「今、既に誰かを殺そうと企んでいる、愚かな人間がいるかもしれない……」

またもや、沈黙は俺たちを襲った。

「そういう人がいないことを願うよ」

俺は独り言のように言った。

見た感じ、何かを企んでいるような人間は見当たらないが。

「そうだね。そんな人いるわけ無いもんね」

電子生徒手帳に目を通したまま、桜谷さんは言う。

「どうやらこの電子生徒手帳とやらには、学園内の見取り図も載っているようだな」

入江君の発言に、全員が反応し、電子生徒手帳に再び視線を戻した。

たしかに、見取り図が載っている。個室らしきものが確認でき、他にも食堂や実験室など、細かく表示されている。

「この個室で寝泊まりするってわけね、なら、僕は先においとまさせてもらおうよ」

時君はそう言つて、扉の向こうに消えた。それにつられるように各自それぞれの個室へと向かった。

これが俺の個室か。

真っ白な壁と天井。普通のベッド。

リビングのようにくつろげる空間がそこには存在していた。

なんだか、今日はいろいろあつて疲れちまつた。

学園生活が始まつた。ただし、普通のではない。「卒業」というルールの存在する、永遠の学園生活だ。

とにかく、今日は寝よう。

明日にでも、この学園の探索でもしよう。

私立未来ヶ丘学園 生徒名簿

【超高校級の一般人】両角徹（もろずみとおる）

身長172.4 cm 体重59 kg 胸囲81 cm 血液型A型 誕生日12月12日

男

一人称：俺 呼び方：男：（苗字）君 女：（苗字）さん

好きなもの：米、パン 嫌いなもの：お化け屋敷

見た目：黒髪で長めのショート、アホ毛あり。グレーのパーカー、青のジーンズ、白いスニーカー。

本作の主人公。見た目や口調など、ほとんどが普通。特に得意なことでも苦手なことも無く、自分の取り柄が無いことは自覚している。基本、すぐに周りとなじむくことができ、自然と友人が寄ってくる。正義感は一倍感えない。

「それは違う!」「人が殺し合うなんて、そんなのおかしい!」

【超高校級のパティシエ】桜谷小麦（さくらやこむぎ）

身長163.7 cm 体重47 kg 胸囲75 cm 血液型B型 誕生日6月8日 女

一人称：私 呼び方：男：（苗字）君 女：（下の名前）ちゃん

好きなもの：ケーキ作り 嫌いなもの：野菜全般

見た目：金髪でセミロング。中学校時代の青ブレザーと青スカートを着た髪飾り。コック帽子の形をした髪飾り。

パティシエ界の魔女と呼ばれるプロのパティシエ。その呼称とは違って、高い声で優しい口調。誰にでも優しく接することができ、明るい性格。マイペースな一面がある。

「私に作れないケーキは無いの」

【超高校級の歌手】天宿歌子（あまやどりうたこ）

身長166・1 cm 体重49 kg 胸囲80 cm 血液型O型 誕生日7月10日 女

一人称：私 呼び方：男：（苗字） 女：（苗字）さん

好きなもの：マイク 嫌いなもの：協調性

見た目：茶色がかかった黒髪でミディアムヘア。赤いシャツの上に黒いジャケット。膝下の丈のスカート。

ライブツアーで日本中を駆け回っている超人氣歌手。とても透き通っていて、胸にまで響くような歌声を持っている。裏では口調が若干荒く、過激な言動も多々。

「何？他の歌手？蹴り落としてやるわよ」

【超高校級のハッカー】時幽一（ときゆういち）

身長173・5 cm 体重66 kg 胸囲84 cm 血液型A型 誕生日1月4日 男

一人称：僕 呼び方：男…（苗字）君 女…（苗字）さん

好きなもの：人参 嫌いなもの：セキユリティソフト

見た目：銀髪のショートヘア。ドクロの描かれた黒いコート、黒いマフラー、黒いズボン、グレーのスニーカー。

日本ハッカー界で一目置かれた存在。高度なテクニックのハッキングを使って、ハッカーに対抗する。黒一色な見た目とはうって変わって穏やかな表情と口調。口調には余裕が感じられる。

「ハッキングに僕は人生を捧げる…」

【超高校級の養蜂家】二階堂響八（にかいどうきようや）

身長177.3cm 体重69kg 胸囲88cm 血液型AB型 誕生日8月28日

男

一人称：俺 呼び方：男…（苗字） 女…（苗字）さん

好きなもの：はちみつ 嫌いなもの：アリ、イチゴ

見た目：茶髪のベリーショート。白の無地に緑の線が入ったジャージ上下を着用。常に麦わら帽子を身につけている。

養蜂家の息子として生まれた。今まで、一度も蜂に刺されたことが無いという。本人曰く、蜂と会話ができるらしい。いつも所持しているカバンには数匹の蜂が、生きたま

ま入っている。男にはうるさく、女には甘い。

「この蜂は大事な大事なお友達さ」

【超高校級の中二病】闇野木炎呪（やみのきえんじゅ）

身長176.0 cm 体重64 kg 胸囲78 cm 血液型B型 誕生日10月31日

男

一人称：我輩 呼び方：男：（苗字） 女：（苗字）

好きなもの：呪術について書かれた本 嫌いなもの：ピーマン、将棋

見た目：赤色の髪でショートヘア。炎がデザインされた黒パーカーに学ランズボン。左手には白いテープが巻かれている。

中二病かいの第一人者（？）。地球に邪魔者が侵入できないように、結界を張っているらしい。言動という言動に不可解な言葉が混じり、相手を混乱させる。

「我輩のこの領域（テリトリー）に入った者は封印されるであろう」

【超高校級の盲目】福巡円（ふくめぐりまどか）

身長156.5 cm 体重45 kg 胸囲72 cm 血液型A型 誕生日7月15日 女

一人称：わたくし 呼び方：男：（苗字）君 女：（下の名前）さん

好きなもの：海の声 嫌いなもの：砂嵐

見た目：薄めの金髪でロングヘア。セーラー服、青スカート。

生まれつき盲目だが、他人の補助がなくとも、自分で歩くことができる。嗅覚と聴覚はとても敏感で、どんなにかすかな音もおいも逃さない。冷静な口調で常に敬語。

「私の目は欺けませんわよ。まあ、目は見えてないんですけどね」

【超高校級の華道部】琴津植華（ことつうえか）

身長154.5 cm 体重44 kg 胸囲74 cm 血液型A型 誕生日8月7日 女

一人称：うち 呼び方：男：（苗字） 女：（下の名前）

好きなもの：庭、信頼 嫌いなもの：助けられること

見た目：深緑の髪でツインテール。花が描かれた着物。

日本華道コンテストで数十回の優勝経験があり、華道のプロ。能天気で行動がおどおどしている。誰かに助けられると、相手を呪ってやると言わんばかりににらみつける。

「えへへー。お花さん綺麗だなあー」

【超高校級の生徒会長】入江鋼太郎（いりえこうたろう）

身長176.8 cm 体重74 kg 胸囲84 cm 血液型O型 誕生日2月9日 男

一人称：俺 呼び方：男：（苗字） 君 女：（苗字）さん

好きなもの：ライダーシップ 嫌いなもの：ネガティブ思考

見た目：薄めのライムグリーンの髪で長めのショート。学ラン上下、メガネを身につけている。

何度も生徒たちをまとめ、学校を超エリート校へと変化させた。声はハキハキとしていてとても大きい。落ち込んでいる人には励ましの声をかける。

「俺は君たちを絶対に正しい道へ導いてみせる！」

【超高校級のゴルフ選手】オリヴィア・バーンスタイン

身長170.9 cm 体重?? 胸囲78 cm 血液型AB型 誕生日5月22日 女

一人称：アタシ 呼び方：男…（苗字） 女…（下の名前）

好きなもの：寒さ チョコレート 嫌いなもの：車酔い

見た目：紫色の髪で右サイドテール。白いブレザー、ショートパンツ。サンバイザーの帽子。

世界中のゴルフ大会で優勝している女性ゴルフ選手。全世代の男性から絶大な人気を誇り、雑誌の取材に引つ張りだこ。フランス人だが日本生まれ日本育ちのため、フランス語は全く話せないが、日本語は流暢である。常にさわやかでポジティブ。

「アタシってなんか注目されるのよね…」

【超高校級の解剖医】開木瞳美（ひらきひとみ）

身長157.7 cm 体重43 kg 胸囲73 cm 血液型A型 誕生日11月11日

女

一人称：私 呼び方：男…（苗字） 君 女…（苗字）さん

好きなもの：臓器 嫌いなもの：同情、海

見た目：赤髪のロングヘア。グレーのカチューシャ。白衣。胸ポケットに注射器、首に聴診器をかけている。

驚異の解剖技術の持ち主。いくつもの事件の究明に貢献してきた。とても落ち着いていて、遺体を目の前にしても表情一つ変えない。

「あから、注射器刺さないとダメみたいね」

【超高校級の占星術師】巫天文（かんなぎてんもん）

身長180.5cm 体重76kg 胸囲87cm 血液型O型 誕生日4月12日 男

一人称：オラ 呼び方：男：（苗字） 女：（苗字）

好きなもの：星座 嫌いなもの：狭い部屋

見た目：左半分クリーム色、右半分は黒色の髪、ポニーテール。学ランと青ジャージのズボン、若干汚れていて、ツギハギ。常に装飾の多い水晶を持つ。

人間や社会についてくわしく占う能力を持つ。元氣のある声で、挙動不審。占いには絶対的な自信を持っている様子。

「オラにわからないことは無いのサ」

【超高校級の金運】光金リョーマ（みつかね）

身長174.9cm 体重76kg 胸囲83cm 血液型AB型 誕生日9月26日

男

一人称：自分 呼び方：男：（下の名前）君 女：（下の名前）さん

好きなもの：福沢諭吉 嫌いなもの：オークション

見た目：レモン色の髪で長めのショート。丈の長いシルバージャケットとジーンズ。ニツト帽を着用。髪の右にヘアピンをつけている。

道を歩けばお金が落ちている、宝くじを買えば必ず当たる、まさに金運の持ち主。頭をかくのが癖。声に抑揚は無い。

「超高校級の金運だって？ どうせ他の運は無いんだらう？」

【超高校級のラーメン職人】石麗宝（せきれいほう）

身長164.1 cm 体重48 kg 胸囲77 cm 血液型A B型 誕生日3月10日

女

一人称：あたい 呼び方：男：（苗字） 女：（下の名前）ちゃん

好きなもの：味噌 嫌いなもの：カウンターテール

見た目：茶色がかった黒髪で団子のポニーテール。赤のチャイナ服。

ラーメン界のダークホースと呼ばれ、日本ラーメン協会の副会長を務める。太極拳が得意。中国人と日本人のハーフで、中国語は話すことができない。

「こう見えても、中国語話せないのよ」

【超高校級の重量挙げ】百鬼勇夜（なぎりいざや）

身長182.2 cm 体重80 kg 胸囲91 cm 血液型A型 誕生日5月1日 男

一人称：俺 呼び方：男…（苗字） 女…（苗字）

好きなもの：ダンベル 嫌いなもの：ネズミ、ハムスター、嘘

見た目：白タンクトップ上下。白スニーカー。オレンジ色のトゲトゲ髪。

重量挙げ大会で優勝経験が多数、車の下敷きになった人の救助活動も称えられた。太い声で筋肉の量は通常の何十倍もあるようだが、弱気な面もある。

「困ったことがあつたら、俺に言えや。力仕事ならな」

【超高校級の聖職者】東雲聖里（しののめひじり）

身長149.6 cm 体重42 kg 胸囲70 cm 血液型A型 誕生日6月25日 女

一人称：余 呼び方：男…（苗字）様 女…（苗字）様

好きなもの：ロザリオ 嫌いなもの：西、高い所

見た目：黒色の髪でロングヘア。白リボン。右目に包帯。グレーを基調としたセーラー服、スカート。

東の雲という宗教の創始者。宗教には特に詳しい。普段は暗めだが、もう一つの人格になると、キレイやすい性格になる。極度の高所恐怖症。

「余は皆のものを新世界へ導くためにこの身を捧ぐ」

CHAPTER 1 『ラブ・エフエムラル』

(非) 日常編 I

「お〜い」

高い声と同時に何かをたたく音が、俺の耳に飛び込んだ。ゆっくりと体を起こす。まだ、寝ていたい気分だ。

何かをたたく音の正体は、ドアをノックする音だった。重い足取りで、ドアのほうへ足を運んだ。

ドアの鍵を外して開けてみると、一人の人間がいた。

「えーっと、両角君…でいいんだよね」

そういつて彼女は笑顔を浮かべた。

たしか、超高校級のパティシエの桜谷小麦っていう人だったかな。

「ああ、おはよう」

自分でも信じられないほどの力のない声が漏れた。

「寝てたのかあ。まだ日は変わってないよ」

「え？」

部屋の壁の時計を確認してみると、長針は12、短針は7をさしていた。

「夜の7時です。もうすぐ夜ご飯の時間なので、私が呼んでくることになったの」
桜谷さんはそう言う。

ああ、なんだ。俺はボケちまったみたいだ。

「さあ、行きましょう。みんな待ってるよ」

~~~~~食堂~~~~~

両開きのドアをくぐった先は、食堂だった。

雰囲気を一言で言うなら「洋風」であった。

学園とは思えない壁と天井、そして何よりも目立つシャンデリア。

俺は息をのんだ。

中央には長テーブルがあり、それを囲うようにして皆は座っていた。

空いている席に着くと、それを待っていたかのように入江君が口を開いた。

「あのモノクマとやらは俺たちにコロシアイをさせたがっているらしいが、君たちはこの状況をどう見る？」

「まだ信じ切れてないね」

ほおずえをつきながら、時君は言った。

「ぬいぐるみが言ったことを全て鵜呑みにしている奴はいないだろう」

「同感だな」

そして入江君は、グラスに入った飲み物を一口、上品そうに飲んだ。

「でも、この学園から脱出することは不可能のようよ」

胸ポケットの注射器を触りながら、開木さんが呟くように言う。

「窓は全部鉄板で内側から封鎖されてるわ」

「そうか…。どうやら俺たちに何かをさせたいことはたしかだ」

「何かって、コロシアイなんでしょ？」

天宿さんは苛立った口調だ。

食堂の雰囲気は何かと重い。

「本当に殺人を犯す人なんてこの中にいるか？」

と二階堂君ははちみつをなめながら言う。

「いくら卒業ができるからって、人殺しをするような人はいないと思うよ」

少々、声が大きくなった。

声が大きくなったのは、自分の正義感のせいだろうか。

昔から友人によく言われる。お前は正義感がありすぎるって。

「そうだといいんだけどねえ…」

入江君は唇を噛んだ。

「じゃあ、オラがみんなの未来を占ってやる！」

あまり状況を把握していないのか、巫君は明るい声で言った。

「君は占星術師だろうか？ 人間や社会以外のことがわかるのか？」

「お、そうだったな」

「とにかく、この学園内をもっと探索する必要があるんじゃない？」

飾られた花を眺めながら、琴津さんは言った。

「そうですね、このまま食事しているだけでは何もわかりませんものね」

福巡さんは誰よりも冷静な口調だ。

「次、太陽が昇る刻、みんで見極めようではないか」

闇野木君が何を言っているのか、俺にはわからなかった。

「明日、本格的に探索してみるか。じゃあ皆は朝この食堂に集合してくれ」

「何か、大変なことに巻き込まれてるのはたしかかなようだね……」

歩きながら桜谷さんは目を伏せた。

「何が起こっているのかはわからないけど、コロナイなんて起きないよ。絶対に」

俺はちよつと格好つけて言いたかったが、これが限界であった。

「コロナイなんて絶対に起きないよ」とは言ったものの、その自信はあまりなかった。

「うん、そうだよ、人が殺し合うなんて絶対に無いもんね」

「…明日探索するし、きつと何か新しいことがわかるよ」

そう言って、俺は桜谷さんと別れて、自分の個室に戻った。  
さつきも寝たはずなのに、どうしてだろう。

どつと、疲労感が押し寄せた。

ああ、もう寝よう。明日になれば何かわかるはずだ。

そう信じ、俺はベッドに身を投げた。

そして目を閉じた。

## (非) 日常編 II

「オマエエラあ、おはようございませす。7時、朝ですよ〜」  
うるさい声が、鼓膜を通して頭に響いた。

俺は起き上がった。

「ああ……うるさい……」

朝からこんな声を聞かされて、良い気ではない。

えっと、たしか集合は食堂だったな。

くくく食堂くくく

西側の入口から食堂に入った。

まだ数人の姿しか確認できない。

「あ、みんなおはよう」

全然声が出ない。喉が乾ききっているようだ。

「あら、普通のくせに早いのね」

よくわからないことを言ったのは開木さんだ。

「他はまだ来てないのか、頭をハッキングしてやろうかね」

時君が恐ろしいことを口にする。

入江君は椅子に座って頬杖をついている。

それから少しして、何人かがやってきた。

「いやああ、ちよつと寝坊しちやつてえ。ハハハ」

二階堂君は口を大きくあけて笑う。

「寝坊とは何事か!!」

入江君が噛み付く。生徒会長さんにはとても気に入らなかつたようだ。

「昨日深夜まで蜂たちとたわむれてまして…」

「この状況で、呑気にたわむれてたのか」

「いや、ね? 蜂たちもたわむれたい頃でね」

蜂とたわむれるつてどういうことだろう。

十分ほど経つてようやく全員が集合した。

「やつと全員集まつたか。遅いぞ」

かなりお怒りの入江君。

「まあまあ、カリカリしなさんな」

苦笑しながら光金君が言う。

「では、この学園内を探索しようと思うが」



「適当にグループ分けして探索させたほうが効率が良いと思われませんが」

福巡さんが提案した。目は閉じたままだが、その目はしっかりと入江君をとらえてい  
るようだ。

「名案だな」

闇野木君が手を組んだまま発言した。

「えーつと、昨日ちよつと話したよね。よろしくね」

桜谷さんは俺に向かって笑顔を作った。

「あ、うん、よろしく」

グループ分けの結果、俺は桜谷さんとペアになった。

なんだかんだで女子と話すのは緊張する。

探索する範囲は二階東側を担当することになった。

「よおし、じゃあ各グループ探索に行ってくれ」

入江君が大声を出した。

「行きましよ、両角君」

そうやって桜谷さんは東側の出口のほうへ、先に歩き出した。

俺は無言でその後を追った。

桜谷さんの背中を見つめながら足を運ぶ。

…何か懐かしい気がする。この背中が…。

電子生徒手帳を確認した限りは、二階の東側には、美術室、美術準備室、音楽室、講義室、物理教室が存在しているようだ。

東側の階段を上った先、目の前に現れたのは講義室だった。

講義室の中は、長テーブルと椅子が並んでいて、前方にスクリーンがある。

「講義室ってどういうところなんだろう」

「講義室だから、講演だとか話し合いだとかをするための部屋なんじゃないかな？」

見渡しながら簡潔に説明した。

特に派手な部屋でもなく、教室に比べると大分殺風景だ。

「なんか食堂のテーブルより痛そうね…」

角を見ながら桜谷さんは言った。

たしかに、食堂のテーブルはテーブルクロスで覆われているから、こちらのほうが危険だろう。ここには注意を向ける必要があるそうだ。

「次、行きましょ。物理教室があるよ」

桜谷さんとはとつと先に行ってしまう。

なんだ…。先ほどからしているこの懐かしい気分は。桜谷さんとは確実に初対面はずなのに、何か懐かしい…。

もやもやした気持ちを抱えたまま、講義室を後にした。

## (非) 日常編 Ⅲ

夕方ごろ、探索のために散らばったみんなは食堂に戻ってきた。

「みんな戻ってきたようだから、報告を始めてくれ」

入江君は難しい顔をしている。

「1階の西側は生物教室、物置、家庭科実習室、待機室、事務室、職員室、学園長室、そして俺たちが寝泊まりする個室があったよ。職員室や事務室に教師や他の生徒の姿は確認できなかった。どうやら、本当に俺たちしかここにはいないようだな」

そう言った時君はため息をついた。

「学園長室にも誰もいなかったよ。てつきり、あのモノクマでもいるのかと思ったけど」  
オリヴィアさんはゴルフ帽子を被りなおしながら言った。

「1階の東側には、天文学教室、会議室、生徒会室、保健室、図書室があったわよ。同じく人は誰もいなかったわよ」

天宿さんは壁にすがっている。

「保健室は薬とか消毒液だとか充実してたから、けがや病気でも一応困らないようだったぜ」

巫君は口に笑みを浮かべて言う。

「2階の西側……。恐るべき機械の行進曲、化け物が植えられた庭、普通な領域、毒薬研究の砦があつたぞ……」

闇野木君が呪文を唱える(?)。

「視聴覚室、植物室、少人数教室、化学教室があつたわよ。わかりやすように訂正しておくれ……」

開木さんは呆れて言う。

それを見て、桜谷さんは苦笑いする。

「あ、えつと2階の東側には美術室とその準備室、講義室、音楽室、物理教室があつたよ。こつちも特に収穫は無かつたよ」

俺もみんなにならつて報告を済ませる。

入江君はふーつと息を吐いて、

「やはり、出られそうなところは無かつたか」とつぶやいた。

「窓は内側からしつかりと止められてるし、出口という出口もすべて閉じられてる」時君が考えるポーズをする。

「どうやら、3階もあるみたいだよ。階段がまだ上に伸びてたよ」

琴津さんは相変わらず、能天氣を露呈させたような動きをとる。

「1階の西側のさらに奥が例の最初の体育館だったな、さらにその奥に屋内プールもあつたよ」

光金君が言った。

「窓を壊せないか試してみたが、かなり頑丈に止められている。壊して外に出るのは不可能だな」

と百鬼君が拳を作って言う。

「麗宝さんと確認して分かつたんだけど、個室は完全防音になっていて隣でどれだけ大声を出しても外には聞こえない設計みたいよ」

福巡さんがゆつくりと口を動かす。

「円ちゃんの言うとおりでだよ。あたいのこの大声でも歯が立たないなんて!!」  
なぜか悔しそうにしゃべる石さん。

「入江様と一緒にこの食堂を探索してたけど、奥に厨房があるみたいね」  
東雲さんがその厨房の方向へ体を向ける。

「ああ、かなり大きめの厨房だった。おまけに冷蔵庫には大量の食料が押し込まれるように入っていた。おそらく食料の面では困ることは無いと思うね」

入江君は冷静な口調だ。

「そういえば、二階堂君、君は何をしていたんだ？」

「俺か？ 蜂にエサ遣りしてたよ」

「探索してないのか全く……」

その日の探索は終了し、夕食を食べて、就寝となった。

次の日も探索は行われたが、情報はほとんど得られなかった。

それからは特に事件が起きるでもなく、とても平和な日々だった。

そんな何もない日々が3日続いた。

その3日目、ついにあいつが動き出した。

「あゝ、校内放送。オマエラ、至急体育館にお集まりください」

くくく体育館くくく

「モノクマ、突然呼び出してどうした」

俺は体育館に足を踏み入れた瞬間に大声で言った。

「まあまあ、はやくみんな入って」

モノクマは演台の上でくつろいでいる。

ぬいぐるみの癖に生意気だな。

全員が体育館に入り終わると、すぐにしゃべりだした。

「( ) 数日間殺人が起きてない！ とてもつまらない。こんな普通な日々は僕にとっては

「退屈でしかないんだよ」

俺たちは黙って聞いていた。

「状態、環境、すべてが完璧なのに何が足りないのだろうって考えたんだよ。考えて考えて考えて考えて。そして何が足りないかわかったクマ。ずばり、動機だよ」

「動機？」

石さんが言う。

「そうだよ、動機が無ければ殺人なんて起きるはずが無いんだよ。そこでさ、思いついたんだ。動機が無いなら作ればいいってね！」

「動機を作る？自分には理解できないっすね」

光金君が首をかしげる。

「わけのわからないことしか言わないな、このぬいぐるみは」

時君が口を酸っぱくした。

そんなのはお構いなしにモノクマは続ける。

「と、いうことで、今からオマエラに動機をプレゼントしちゃいます」



## (非) 日常編 IV

「動機だど?」

時君が低い声で訊いた。

「あつはっは、動機があればみーんな殺し合つてくれるでしょ??」

「何を馬鹿なことを抜かしてやがるんだ。動機も何もな、俺たちは初対面なんだぞ。動機なんてあるはずがない」

と入江君が嘯み付くように吠える。

「入江君くく、君つてやつはほんと鈍感だクマねえ」

「何だと」

「誰も人に対する動機だなんて言つてないクマよ」

「じゃあ、どういうことなの?」

桜谷さんの顔は一層険しい。

「この学園を出たがるような動機、つてことだよ。うふうふうふう」  
相変わらず能天気な声は俺の神経を刺激する。

しばらく沈黙が続いた。ただ、壇上であのぬいぐるみはずっとダンスをしている。

「分かってくれたかなあ？つてことで、これが動機だよお、しつかりうつつかりぼつつかりちやつかり受け取ってくれクマよ、白熱なコロシアイ、楽しみにしてるクマよ〜」

そう言つて姿を消した。

「相変わらず逃げ足だけは早いのね」

オリヴィアさんが眩く。

「あの段ボールじゃないか？」

二階堂君は壁際にある段ボールを指さした。

人間は入らないが、かなりの量の物が収納できそうな段ボールである。

俺たちはその段ボールに近づいていった。

全員で段ボールの中を覗き込んだ。

「DVD??？」

琴津さんが言った。

そこには人数分のDVDが納められていた。それぞれに生徒名が書かれたシールが貼られている。

「一体、これの何が動機だつて言うんだ？」

光金君はDVDを手を取つてそれを眺めた。

「これってもしかして、視聴覚室で見れるのでは…？」

福巡さんがあまり表情を変えずに言った。

くく視聴覚室くく

視聴覚室はだいぶ広がった。

中央の奥に巨大なスクリーンがあり、それを囲うように円形に、そして階段状に机が並んでいる。そして一つの机に2つずつ、椅子が配置されている。

そしてそれぞれの席に一つずつ、パソコンが置かれていた。

「なるほど、これで見られるわけね」

開木さんはそう言うと、近くの席に着席した。

俺もそれに倣って上のほうの席に座った。

他のみんなもそれぞればらばらに席に着いた。

机に置かれていているヘッドホンを装着し、DVDをパソコンに挿入した。

一体、このDVDに何が記録されているのか。

突然パソコンの画面は、砂嵐に襲われた。

ザーツという音が耳から入り、脳みそまで響く。

数秒後、砂嵐は突然やんだ。

画面には既に砂嵐は無く、複数の人間が映っていた。

これは…。父さん、母さん、ばあちゃん、妹のコハク、兄さん…。

そして映っている場所は、俺の家のリビングだった。

一体なんなんだこれは…。

「やあ徹。元気にしてるかい？」

父さんが笑顔でこちらに向かってしゃべる。

「どう？学園生活慣れてきた？」

母さんも笑っている。ばあちゃんもコハクも兄さんも…。

なぜか笑みがこぼれた。笑顔を見ると、なんだか、幸せな気分だ。

久しぶりに見た顔に安心したのかもしれない。

ザー

再び砂嵐が画面を覆った。

そしてすぐにその砂嵐は消えた。

な、なんだこれは…。

リビングがずたずたになっている…。

カーテンは引き裂かれ、ソファは破壊されている。

そしてあの5人はリビングのいたるところで倒れていた。

血を流して。

一体これはなんなんだ!?

父さん…!?母さん…!?おい、何があつたんだよ!

心の中で叫ぶ。当然、画面の中の彼らには聞こえない。

すると、ヘッドホンからあの忌まわしき声が流れてきた…。

「うふふふふふふ、あつはつはつはつは——」

それでDVDは終わっていた。

理解した。

なぜこれが動機になるのか、理解することはそう難しいことではなかった。

自分の中に何か熱いものがこみ上げてくる。

憎しみ…という表現が正しいのだろうか…。

俺はゆっくりとヘッドホンを外した。

絶望感を味わった気分だ。いや、現に味わっている…。

そして、もちろんこんな気持ちになっている人は俺だけではなかった。

「ふ、ふざけやがって!」

入江君はヘッドホンを机に叩きつけた。

ヘッドホンは力なくバウンドし、床に着地した。

「余の信者を…」

「か、母さん…」

「いやあああああああ」

視聴覚室内は悲鳴が飛び交っていた。

みんな同じようなものを見せられたのだろう、顔が青かった。

「あああああああああ」

百鬼君は頭を抱えて叫んでいる。

——これで誰かが殺人を考える、なんてことないだろうな——。

## (非) 日常編 V

食堂での食事はとても気が重かった。

食堂内に響くのはフォークやスプーンと皿が触れ合う音だけだった。衝突音が耳に入る度、俺はとても緊張した。

サラダを口に運びながら、他のみんなの様子を窺った。

どの顔も険しかった。恐怖に怯えている顔もあれば、明らかに怒っている顔もある。

まあ、あんなビデオを見た後では、こうなるのも仕方がないものだと思う。俺だって、今とても憤ろしい。自分の中で何か煮ええたぎってグツグツ言っている。

ん？

待てよ？

あの人はどうやって――。

「あの一」

全員が声の方向へ顔を向けた。

声をあげたのは桜谷さんだった。

「すごく訊きづらいんだけど…、あのビデオの内容って、どんなんでした…か…？」

勇者だ、と俺はすぐ思った。この空気の中、この話を切り出すのは勇気のいる行為である。

「桜谷さん。気になる気持ちは分かるけど……。今はその時じゃないわ。あんなものを見せられて、落ち着いていられる人なんていない。私だってそう、桜谷さんだってそうでしょう？」

開木さんがすらすらと言う。

自分の中の開木さんのイメージが変わった気がする。

彼女もずっと冷静っていうわけじゃない。彼女もあのビデオを見てショックを受けたんだ。

開木さんの言葉を受け取って、桜谷さんは静かに頷いて、再び手元に目を落とした。桜谷さんの横顔もどこか虚しげであった。

——この横顔——。

まただ。

またこの懐かしい雰囲気。桜谷さんを見るとなぜかこんな雰囲気に襲われる。一体何だっというんだ…。

何かは分からない。しかし——。桜谷さんになら、何でも話せる気がする。



俺はそう思った。

「あつはつは、みくんな随分と憔悴しきってるなあ」

監視カメラを通した映像を見ながら、モノクマは笑い声のように言った。

「夕ご飯が終わっても、みんな誰も話さないんだもん。これは期待できそうだねえ。ハラハラのドキドキだよお」

監視カメラには何人もの生徒たちの様子が映し出されている。

そしてくるりと向きを変えて言った。

「生徒の監視、頼むからねえ？ これは君の手もかかってくるからね。もししくじっちゃったら、こつちが何されるかわかんないからなく。丸焼きにされたらもうだくいだくいきゅー」

「承知してるよ」

モノクマの目の前にいる人物は、平然としている。

「ワックワックでドキドキなロシアイ、楽しみにしてるよ」

くく自室くく

俺はベッドに寝転がった。

天井にはいくつかシミがついている。そのシミはまるで人の顔のようで薄気味が悪い。それにしてもさっきのビデオ、何か足りない気がした。なんなのだろう。それ

に、どうやってあのビデオを撮影したのだろうか。そして今家族は…、俺の家族は…。

頬に何か冷たいものが流れていく感触があった。

許せない…。誰がこんなことを仕組んだんだ…。

ああ、もう。

涙が止まらねえ。

滅多に泣かない俺を泣かすなんて…。本当に……………。

コンコン

扉のノックで俺は我に返った。

「どなたですか?」

咄嗟に敬語が出てしまった。おまけに声は震えている。

「さ、桜谷です…」

はっとした。

頬の涙をぬぐった。こんなところを見られるわけにはいかない。

俺はドアを開けた。

「あの、ちよつといいかな」

「え? ああ、うん」

桜谷さんは部屋に音をたてないように入ってきた。カチャという音がした。

「なんで鍵閉めたんだ」

と言おうとした瞬間だった。

桜谷さんが突然何か細いものを取り出した。そして、その細いものを持ったまま襲い掛かってきた。

「うわ!?!」

何が何だかわからなかった。

「ごめん! 両角君!」

再び突進してきた。

そして俺の目めがけて…。

ぎりぎりでかわした。

相当力を入れていたのか、細長いものは壁に突き刺さった。部屋が暗闇だったからわからなかったが、よく見るとその細長いものはどうやらアイスピックのようだった。

桜谷さんはアイスピックを抜こうと踏ん張っている。

俺は間隙を縫って、刺さったアイスピックを抜き取った。

そして、桜谷さんはその場に力なく座り込んだ。

「ごめん! 本当にごめんね!」

彼女は泣きだした。

桜谷さんは今、俺を殺そうとした。

「本当に……」

泣いているせいで、声は掠れている。

「どうしたんだよ、桜谷さん……。なんで俺を殺そうと……」

「……」

桜谷さんは手で顔を覆って、泣いているだけだった。

そして数秒経って、桜谷さんの口が動いた。

「友達が……先生が……」

すぐに悟った。

この原因があのだというところが。

「桜谷さん……。大丈夫だよ……。絶対にみんな無事だよ……」

俺にはこの程度の言葉しか掛けられない。不器用な言葉しか。

「希望を持たないとダメです」

桜谷さんに言いながら、自分にも言い聞かせた。

そう。

きつと大丈夫だと。

「……ありがとう」

彼女はただ一言答えた。

「ごめんね、迷惑かけちゃって」

「いいよ。なんか困ったことがあったら、俺に言ってくれな? 相談乗るからさ」

自分ながら、良いセリフだと思った。

「ありがとう。少し落ち着いてきた」

それから少しして桜谷さんは笑顔で部屋を後にした。

笑顔と言っても、明らかに作り笑いであった。でも、自分の言葉が少しでも自信に、希望になったのなら少しは桜谷さんを救えたのかな、と俺は強く感じた。

なんだか分からないけど、恐怖と驚きと憎しみの中に謎の満足感を得た。「いいことをした」という気分だ。

そんな満足感に浸ったまま、俺はやがて夢の中へと落ちていった。

目が覚めた俺は顔を洗って、朝食を食べるために食堂に向かった。

すると食堂の扉の前に2人の人間がいた。

蜂と仲良し二階堂君と、占星術専門の巫君だった。

「どうしたの?」

「ああ、それがなあ、食堂の扉が閉まってるんだ」

巫君が扉を拳で2回叩きながら言った。

「それで向こうの扉にも行こうと思っただが、通路にシャッターがあつて塞がれてたんだ。シャッターの開閉ボタンはズタズタに破壊されていたよ」

と二階堂君は指先に蜂をとまらせた。

「鍵が閉まつてるの？」

「そうみたいだよ。んーどうにか占星術を使つて開けれないかなあ」

それはさすがに無理だよ…。

「あ、この鍵開けるか壊すかなんかできないかな」

「おいおい本気か、両角」

「でも、食事ができなんじゃあまずいじゃん」

「それもそうだな。あ、これでいけるんじゃないやねえか？」

そう言つて巫君がカバンから取り出したのは、針金だった。

「なんでそんなもんがあんの…」

二階堂君が驚きながら言う。

「占星術の必需品だよ」

占星術つてそんなん使うんだ…。

そして巫君は針金を鍵穴に差し込んで、器用に動かし始めた。

たった一分足らずで、

「はい、終わった」

「え？ もう？」

思わず声に出た。

「もしかしてお前……。泥棒とかしてないよな……」

目を丸くしている二階堂君。

「してないよ。よおしこれで飯にありつけるぞ」

「もつと早くからこうしとけば良かったのに」

俺は二階堂君に向かって小声で言った。

「いやあ、針金持つてるなら早く言ってくれよ」

少々呆れ気味だ。まあそれもそうか。

そして、食堂の扉を開けた……。

「あ、あれは——」

長いテーブルの真ん中。

突っ伏している人物がいた。

「寝てんのか？」

二階堂君はゆつくりとその人物に近づいて行った。俺も後に続いた。

突つ伏している人物のすぐ傍には、「睡眠薬」と書かれたラベルがついた小瓶が置いてあった。そして突つ伏している下にも何か白い紙が見える。

「おい、起きろー」

二階堂君が肩をゆすつた。

はあ、とため息をついて手を離れた途端だった。

その人物の体はゆっくりと横に崩れた。そして体全体が床に倒れた。

「おい、まさか——」

隠れていた紙には鉛筆でこう書かれていた。

「もうこんな生活嫌です。私はもう死にます」

床に倒れこんだ、天宿さんの顔は安らかだった…。

冷たい。そして安らかな顔も、どこか悲しげな、寂しげな顔をしていた。

3人の呼吸は止まっていた。

とうとう犠牲者が出てしまった——。



「どうしたんだ？」

と後ろから声がした。入江君だ。

「ここ、これは——!？」

『死体が発見されました——。至急、体育館にお集まりください』  
モノクマの声が食堂にこだました——。

## 非日常編 捜査 I

俺たちは重い足で体育館へ足を踏み入れた。

体育館には既にみんなが集まっていた。

モノクマはいつものごとく壇上に佇んでいる。

「おいモノクマ、今の放送はなんだ」

時君が問う。

「ん〜？ 死体発見アナウンスだよ。クロ以外の3人以上が死体を発見したときに流す放送だよ」

「そういうことを聞いてるんじゃない」

「今のその死体発見アナウンスというのがなぜ流れたのか、が知りたいということだな」

東雲さんが手を組んで言った。

「それは今来た本人たちに訊いたほうが早いんじゃない〜？」

と琴津さんが俺たちのほうを見ながら言う。

全員の視線が俺たちのほうへと注がれた。

「ちよつと俺も頭が混乱しててな」

入江君の口調は明らかに動揺している。

二階堂君が俺の耳元で囁く。

「すまんが、両角が説明してくれねーか？」

「ええ？ 俺が？」

仕方なく俺は一步前へ出た。

「えつと、あの…天宿さんが……その、し、死んでて……」

声が震える。平然を装っているつもりだったが、声の震えが止まらない。

「な、死んでる!? それ本当かよ」

光金君が声を荒げる。

「まさか、誰かに殺されたの!？」

「こ、コロシアイが始まっちゃったっていうのか!？」

「ちよつと、落ち着いて」

体育館の中は悲鳴や怒号で飛び交った。

「あのさ、わやわや楽しんでるとこ悪いんだけどさ」

俺たちのもとへモノクマがとことこ歩いてやってきた。

何だこいつ、本当にぬいぐるみじゃねえか…。

「楽しんでなんかないわよ」

オリヴィアさんがモノクマを睨みつけるが、ひるむどころかむしろ声が明るくなる。「うぶぶぶ」。今回は死者が出るのが早くてちよつと焦っちゃったけど、えつとね、モノクマファイルっていう事件の情報が電子生徒手帳に追加されてるから、それ見て事件解決の参考にでもしてよ」

俺はすぐ電子生徒手帳をポケットから出した。そして、電源をつけて項目を確認した。たしかに「モノクマファイル」という項目が追加されている。

モノクマファイルを開くと、ずらつと文字が表示された。

【モノクマファイル】

被害者：天宿歌子

死亡推定時刻：午前1時頃

死因：中毒死

外傷は特に見られない。

現場：食堂

たしかに事件の情報が記されていた。

「てことであとは現場検証なり事情聴取なり自由にしてもらつて、12時間後に学級裁判を行います。そこでクロダだと思う人物を決めてもらいマース」

「…モノクマよ、一つ聞きたい」

入江君が電子生徒手帳に目を落としたまま、モノクマに話しかける。

「俺が見た感じ天宿さんは自殺に思えた。もしこれが自殺の場合、学級裁判はどうなるんだ」

あ、たしかに。

「もちろん学級裁判は行うよ。自殺だと思うなら、死んだ人に投票すればいい話だからね」

そう言つて、モノクマは姿を消した。

しばらく無言だった。

呼吸すら聞こえてこない。

何人かは誰かがなにか喋つてくれないかと待つているようにも見える。

「はあ、わかつたわよ」

視線を感じて察したのか、開木さんがため息をして俺のほうへ体を向けた。

「両角君、現場に一緒に来てくれる？ 第一発見者の中ではあなたが一番頼れそうだし」

「え？ ああ、わかつたよ」

そして開木さんはそそくさと体育館を出ていった。俺はすぐさま追いかけた。

く食堂く

先ほども見た光景だった

テーブルのそばで、冷たくなった天宿さんが倒れている。

開木さんは天宿さんの死体の首筋に手を当てた。

「本当に死んでいるようね。まあ、死んでるか否かは一目瞭然だったけど」

「ねえ、開木さん、これって自殺……だよな？」

「……あなた自身はそう願っているでしょうね。でも、このテーブルの上を見ただけで

自殺と判断するのは難しいんじゃないかしらね」

「え、どういうことだよ」

「見てみなさい。この鉛筆」

テーブルの上には遺書と鉛筆、そして小瓶だけが置かれていた。

この鉛筆が一体何だというのだろう。

「天宿さんは左利きのはずなのに、この鉛筆は天宿さんから見て右側に転がっているわ」

「なんで左利きだつてわかるのさ」

「天宿さんの腕時計を見たらわかるわ」

そう言われて俺は天宿さんのしている腕時計を見た。

あ、い。

「腕時計を右手にしている……」

「そう、つまり彼女は左利き。なのにこの遺書を書いたときに使用したはずの鉛筆は逆

側に転がっている」

左から右に転がった可能性もあるのでは、と思ったがそれは否定した。

鉛筆が転がるには、遺書の紙の上を通らなければいけないし、その遺書の紙の上に天宿さんは突っ伏していたのだ。

つまり…。

「つまり、これだけの情報でもこれは自殺に見せかけた殺人の可能性が高いと言えるわけ」

「しかし…」

「信じたくないのかもしれないけど、ほぼ確実にこれは殺人よ。モノクマが手を下していないのだとしたら、天宿さんを殺した犯人は私たち15人の中にあることになるわ」

開木さんのその言葉は俺の胸に深く刺さった。

俺たちの中に人殺しをした人がいる、だって…？

開木さんはいつの間にか、入ってきたほうとは反対側の扉へ移動していた。

「鍵がかかっているわね。あなたたちがここに突入した時、あちらの扉の鍵は閉まっていたの？」

「あ…あ、うん」

「……………おかしいわね……………」

「え？ 何が？」

「もしこれが殺人だとしたら、おかしいことになるのよ」

俺にはどういふことかなんとなくわかつていた。

「食堂にある2つの扉はどちらも内側から施錠されていた。壁や天井に窓は見当たらない」

「そ、それって……」

「これが本当に殺人なら……『密室殺人』……ということになってしまふの」

密室殺人……。

……は密室だった……。つまり犯人は最初から自殺に見せかけるつもりだったようだ。

「両角君、行くわよ」

開木さんがそう言った。

「え？ どこに？」

「決まってるじゃない。事情聴取ってやつよ」

コトダマ【右側に転がった鉛筆】

【天宿の腕時計】

【施錠された2つの扉】

を獲得しました。



## 非日常編 捜査 II

「歌子ちゃんが自殺？ そんなわけないと思うよ」

桜谷さんは俺と開木さんに自信ありげにそう言った。何か、根拠がありそうだ。

「どうしてそう言い切れるの？」

俺は訊いた。

「昨日の夕ご飯の後なんだけどね。動機ビデオを見た後だったからまだ落ち着けなくて、気晴らしに学園内を散歩してたの」

「それで？」

「音楽室の前を通った時、何か歌声が聴こえたの。音楽室の扉が少し開いてたから覗いてみたら、歌子ちゃんが熱心に歌の練習してたの」

「たしかあの音楽室は防音だから大声で歌ってもわからないだろうな。扉が開いてたから気づいたということか。」

「集中してたから邪魔しないほうがいいかと思つてそこから退散したんだけど」

桜谷さんはあごに人差し指を当てながら口を動かす。

「まあつまりは、歌を熱心に練習するほどの環境に慣れていたのにあの直後に自殺す

るなんてありえないんじゃないかなあ」

「なるほど」

一理ある。桜谷さんが本当のことを言っているという保証は無いが、真実だろう。俺はそう信じたい。

「彼女の証言が本当なら、天宿さんの自殺説はゼロに近いわね」

コトダマ

【桜谷の証言】

を獲得しました。

その後、桜谷さんに午前1時ごろ何をしていたか訊いたが、彼女は寝ていたという。

おそらく他の人もそう答えるだろう。

何といつても真夜中の犯行である。いや、まだ犯行と決めつけるのは難しいか…。

何人かに事情聴取をしていき、何かヒットしたのは東雲さんの証言だった。

「昨夜…。ああ、午前1時ごろ、死亡推定時刻だとかその頃だったかな。図書室で寝落ちしてしまって急いで自分の個室に戻る時に、体育館の方へ向かう人の姿を見た」

「え？ それって誰!？」

「暗かったけど、近距離だからすぐわかったわ。あれは光金様だったわ…」

コトダマ

## 【東雲の証言】

を獲得しました。

東雲さんの証言の真偽を確かめるために、俺と開木さんは光金君に会った。質問をぶつけると光金君は若干慌てた様子で言った。

「え、自分が疑われてるのか」

「とにかく、どうなの？」

すると、光金君はジーンズのポケットから一枚の紙きれを取り出した。

「このメモで自分は呼び出されたんだよ、あの体育館前にね」

その紙きれには「体育館西側入り口へ来てください」と書かれている。

「てことは光金君はしろ……」

「本当にそれをもらったの？ まさか、自分で書いたとかじゃないわよね」

俺がしゃべり終わろうとした時に、開木さんが眉をひそめて言った。

「だから違うって！」

「じゃあここに同じ言葉を書いてくれる？」

開木さんはノートとボールペンを取り出して、光金君の前に差し出した。

光金君はそのノートとボールペンを受け取って、ノートの上でペンを走らせた。

同じ文章を書いてもらったが、どうやら筆跡が違うようだった。

「疑つてすまないわね」

コトダマ

【光金の証言】

【光金を受け取った紙切れ】

を獲得しました。

「ところで、光金君、そのメモ書き貸してくれる？」

「あ、いいけど」

何をしようとしているのか、分かるようなわからないような。

俺と開木さんは「なぜか」現場に戻ってきた。

開木さんはテーブルの上にそのメモ書きを置いた。

「…予想が外れたわ」

「え？ どういうこと？」

「これが殺人ならこの遺書も偽物でしょ？ だから光金君を呼び出した人物と筆跡が同

じかと思つたのよ。でも…」

「筆跡が違うの？」

「そう。一体どういうことなのかしら」

開木さんが困惑している。

ここから分かることは、遺書を書いた人物と光金君を呼び出すためのメモ書きを書いた人物は別ということになる。じゃあ犯人は2人…？

「…モノクマに訊きたいことがある」

食堂内が俺の声で充満し、そして消えた。

「はいはい」

突然俺の目の前にぬいぐるみが現れた。

「わっ」

「なに驚いてるのさ、呼び出したのは君のほうじゃないか」

「ああ、それで訊きたいんだけどさ。共犯者がいることってありえるの？」

そう、犯人が2人いるならつまり共犯者の存在があるということになる。

「まあありえるけど、卒業できるのは実際に殺人をしたクロだけだよ」

「じゃあ共犯者にメリットはないわけね」

「そういうことだよ開木さん」

ニコニコしながらモノクマは言う。

共犯者がいる可能性は低い…。じゃああの2つの筆跡は一体何なのか…。

「まあてことでおふたりさん、頑張つてねー」

モノクマはそう言って姿を消した。

「あんなやつに言われなくても頑張る気だつっーの」

自分で呼んだのが悪いのだが、あいつの声を聞くと頭が痛くなる。

「6時間経ったわね…。まだ情報が足りないわ」

そして開木さんは出口へ歩いていく。

ん？

何だ…。

何か違和感のような、ムズムズ感がする。

何かを見落としているのか…？

開木さんにはわからず、俺にだけわかる何か…。

俺にだけわかる…。

死体発見時だろうか…。

しかし、死体発見時が何だというんだ。

くそ、スツキリしない。

思い出せ。

「どうしたの？ 早く行くよ」

開木さんの声ではっと我に返った。

「あ、ああ」

学級裁判とかいう裁判までに思い出せるだろうか…。